片倉氏の知行地

慶長7年(1602)12月、片倉景綱が伊達政宗から拝領したのは白石城と刈田郡村々の知行高1300貫文(13000石)でした。仙台藩の重臣は、片倉氏と同じように知行地を与えられていましたが、他家との違いは「所地一円拝領するゆえ、山林竹木を自由にする」という特権を許されていたことです。知行地は検地をした田畑や屋敷のことを指しますが、「一円拝領(知行)」とはそれに加えて山林・沼・沢・原野などを含めた地域を自由に利用できました。その後、仙台藩の一門・一家(片倉氏も一家に含まれる)と呼ばれる大身の家臣にこれが適用されていきます。

当初の知行高1300貫文から、その後の寛永検地や新田開発による知行地加増で、2代重長の時代には1735貫723文、8代村典時代の文化9年(1812)には刈田郡19・柴田郡1・桃生郡6・本吉郡2・遠田郡1の合計29か村へと広がり、1800貫文(18000石)となってそのまま幕末まで維持することになります。これら知行地の村々から年貢・諸役を徴収することで、片倉氏の財政が成り立っていたのです。

◆ **文化9年(1812)10月**
片倉小十郎村典(8代)の知行地一覧

郡　名	村　名	知行高(単位:貫)
刈田	白石本郷	135.561
	鷹巣	48.478
	坂谷	41.935
	森合	78.502
	長袋	45.279
	八宮	34.326
	中目	98.144
	斎川	125.392
	越河	71.688
	郡山	40.705
	五賀	74.506
	三沢	168.630
	大町	70.298
	深谷	95.368
	蔵本	73.731
	小原	59.788
	平	52.132
	宮	120.915
	小下倉	22.800
柴田	平	1.442
桃生	橋浦	117.682
	成田	48.018
	女川	5.121
	皿貝	1.125
	深谷広渕	99.243
	赤井	27.714
本吉	志津川	11.000
	荒戸浜	9.286
遠田	田尻	21.191
合計		1800.000

出典:片倉家資料27　「伊達斉宗朱印状并知行目録写」
原文の掲載順で作成

別冊 史の杜
FUMI NO MORI

東北大学

U-history
CNEAS, Tohoku University
東北大学東北アジア研究センター
上廣歴史資料学研究部門(U-history)

No.8

発行日／2023年10月5日
編集・発行／東北大学東北アジア研究センター
上廣歴史資料学研究部門
〒980-8576 仙台市青葉区川内41
TEL／FAX 022-795-3140
URL／https://uehiro-tohoku.net/
デザイン・印刷／今野印刷株式会社

地域の歴史を知る

片倉氏と江戸時代の白石城

片倉小十郎の城下町白石

平成25年(2013)から、白石市教育委員会とともに市内の歴史資料保全活動を実施してきました。現在の白石市域は、江戸時代の城下町(白石本郷)と近接する刈田郡村々から成り立っています。いずれも伊達政宗の時代に、片倉小十郎景綱が拝領した知行地だったところが多く、白石市の歴史に片倉氏の存在は非常に大きいものだったといえるでしょう。地域のなかを歩いてみると、白石城から武家屋敷、商家、そして農家と緑豊かな田畑や山々が広がります。この多彩な特色をもつ白石市には、古くから続く家々に先祖から託された歴史資料が伝えられ、子孫のみなさんはそれを大切に守られてきました。当地で積み重ねられた研究成果と、私たちが新たに発見した資料を含めて、パネル企画展「片倉氏と江戸時代の白石城」でみなさんに興味深い歴史的事実をご紹介していきます。

草創期：父子２代の活躍　景綱と重長

片倉景綱以前の先祖に関する情報は少なく、後年作成された記録にも諸説が含まれているため、正確なことはわかりません。ひとつには、もともと信濃国出身で南北朝時代に奥州探題大崎氏にしたがい東北地方へ移り、天文年間（1532～55）に出羽国で伊達氏に仕えたといわれています。

景綱は弘治3年（1557）に出羽国置賜郡下長井庄宮村（現・山形県長井市）で生まれました。父の景重は片倉式部と称する米沢八幡社の神官でした（現・山形県高畠町の安久津八幡社という説もある）。少年時代から聡明で、主君伊達輝宗・政宗父子の信頼も厚く、数々の戦功によって伊達家の重臣へと上り詰めました。

片倉小十郎景綱像（仙台市博物館蔵）

2代重長は天正12年（1584）に誕生し、同19年の元服を経て政宗や景綱にしたがい、京都伏見へ向かい、慶長4年（1599）まで当地に滞在します。翌年、伊達政宗が上杉氏の領有する白石城攻めの際、初陣を果たします。そして慶長20年（1615）の大坂夏の陣では、病床の景綱に代わり1400人の片倉隊を率いて「伊達の先陣」を務め、敵方の真田幸村との激闘、後藤又兵衛ら有力武将を討ち取り、「鬼小十郎」の名を天下に示しました。現在、白石城で毎年10月に催される「鬼小十郎まつり」は、その活躍を後世に伝えていることを物語ります。

小関雲洋　白石城之図（明治初年、白石市所蔵）

片 倉 代 々 記

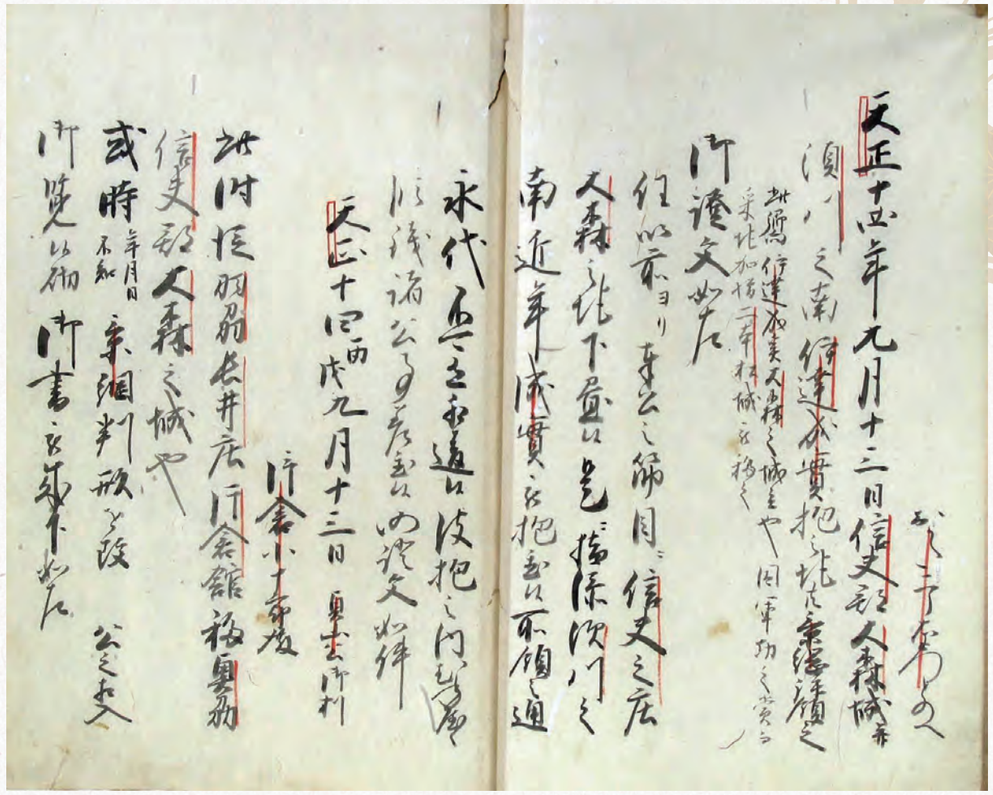
『片倉代々記』は、弘治3年（1557、初代景綱出生）から天保11年（1840、9代景貞逝去）までを中心にまとめた片倉家の正式な記録です。成立時期は弘化年間（1844～47）末期から嘉永年間（1848～54）ごろではないかと推測されています。

本書が有名になったきっかけは、山本周五郎の歴史小説『樅ノ木は残った』（1958年、全2巻）です。その原典となった大槻文彦『伊達騒動実録』（1909年）で、『片倉代々記』が引用され、『刈田郡誌』（1928年）にも参考文献として挙げられました。そして、『白石市史4　史料篇（上）』（1971年）に全文翻刻が掲載されたので、その詳細が明らかになっています。

片倉代々記表紙（個人蔵）

初代景綱から3代景長までは、貞享2年（1685）に4代村長が家臣の本澤大節に編纂を命じ、翌年11月に完成させました。これが『片倉代々記』の基礎になっています。

全体としてさまざまな記事が掲載されていますが、たとえば歴代当主の伊達家への忠勤や貢献、片倉氏の家政、家臣たちの功労、年中行事や儀礼、白石城における普請、領内で発生した災害などをまとめています。これらの記録から各年代の特徴や、伊達家と片倉家の関係および政務の実態を知ることができます。


片倉代々記　天正14年（1586）9月13日　景綱は信夫郡大森城（現・福島市）を拝領